郷土への扉
The gateway to local history

流行病を除ける

これまでの日本の歴史を振り返ると、赤痢やスペイン風邪などさまざまな流行病との闘いの歴史がありました。今回は、その中でも高い致死率であった疱瘡にまつわる話を紹介します。

疱瘡とは

疱瘡とは天然痘ともいい、ウイルス性の病気です。有効な予防方法が開発され、1980年にWHO（世界保健機関）が根絶を宣言しましたが、それ以前は長く人類を苦しめてきました。日本でも古くから流行しており、「疱瘡神」として恐れられ、祭られてきました。

疱瘡除けを目的とした行事は、まじないや※1疱瘡踊りなど時代や地域によって多種多様ですが、全国各地で行われていました。

疱瘡が国分地方で流行したときには、府中町の女性たちが野口方面の家々を巡って米をもらい、その米で小さなにぎり飯を作りました。そのにぎり飯を食べると疱瘡にかからないというまじないをかけ、地域の人々に配ったという記録が残っています。このような行事は「疱瘡勧進」と呼ばれていて、昔は霧島市内の至る所で行われていたと思われます。

疱瘡を除ける赤

感染すると全身に赤いあざが出る疱瘡。身代わりなどの意味で、疱瘡除けに赤いものが重宝されました。

嫁入り道具を模した化粧箱

赤女という鯛を模した鯛車

江戸時代には赤い絵（疱瘡絵）を持つことが流行し、子どもの持つ玩具には赤色がよく使われています。例えば、福島県の赤ベコや東北地方のこけし、熊本県のキジ馬など、全国各地に赤い郷土玩具があります。

それらと似たような玩具が霧島市にもあります。鹿児島神宮の信仰玩具である「鯛車」と「化粧箱」です。「鯛車」は木彫りの鯛に車輪を付けたものです。神話「山幸海幸」の中で、鹿児島神宮の祭神である「山幸彦」がなくした釣針をのみ込んでいた赤女という鯛を模しています。「化粧箱」は香箱とも呼ばれ、山幸彦の妃であるトヨタマヒメが嫁入りする際の調度品を模しています。どちらの玩具も真っ赤に塗られており、子どもの成長を願って飾ったり遊んだりする物です。疱瘡除けを主な目的に作られたものではありませんが、そのような意味合いも含まれていたと考えられます。子どもの成長を願うには、まず子どもを病気から守ることが大切なのです。

昔は病の科学的原因や対処が分からず、人々は病除けの行事などを通して、神仏に願っていました。これは、病気と闘う人々の必死な抵抗であり、心のよりどころでもありました。新型コロナウイルスの終息を願って「※2アマビエ」の絵を描くことが流行するなど、その抵抗の精神は現代にも受け継がれているのでしょう。

（文責＝小水流）

※1 悪疫退散の踊り。今年5月には姶良市下名（しもみょう）で、新型コロナウイルス終息を願う疱瘡踊りが奉納された。
※2 江戸時代に肥後（熊本）で「疫病が流行したときは自分の絵を人々に見せろ」という予言をしたことで知られる妖怪。